二、第八高等学校の創設

◆創設の背景

一八九八（明治三一）年一二月、官立高等学校を一校増設することが帝国議会で議論されました。官立高等学校の設置（増設）は、高等学校令（一八九四年公布）以前の中学校令（一八八六年公布）に基づいて、第一から第五までの高等中学校がほぼ同時に設置されて以降およそ一〇余年ぶりのことでした。

これをうけて愛知県、岡山県、広島県、香川県において六番目の官立高等学校を誘致する運動が行われましたが、最終的には岡山県と広島県による激しい誘致合戦が展開されました。第六高等学校の誘致をめぐる両県の運動は、一九〇〇年三月に終止符が打たれました。勅令によって、岡山県への第六高等学校の設置が布告されたためでした。

なお、この六高設置をめぐる愛知県の誘致活動については『愛知県議会史』にも具体的な記述はなく、その詳細は明らかではありません。

◆愛知県による誘致活動①

愛知県に官立高等学校を誘致するための活動は、一九〇〇（明治三三）年頃から具体化しました。

一八九九年三月招集の臨時県会では「第七高等学校設置に関する寄付金の件」が提案されました。「第七高等学校を本県下に設置せらるゝ場合に於ては其建設費の内へ金十万円及主務大臣の指定により校地凡そ二万五千坪を買収し国庫に寄附するものとす」という内容の同議案は、審議の結果、即日可決されました。この議案が提案された背景には、岡山に第六高等学校が設置されることになったのち一九〇〇年度にも第七高等学校が設置されるという情報を得たため、七高誘致に向けた追加予算措置を早急に行うねらいがあったのです。

また、一九〇〇年一二月招集の通常県会では、翌年一月に「高等学校増設位置に関する件」として内務大臣あての意見書が審議され、満場一致で即日可決されました。この意見書では、いまだ設置場所が明らかになっていなかった七高について、「本県ノ地タル実ニ東海ノ地枢ニ位シ、交通至便四方ノ学ヲ収容スルニ於テ最適当ニシテ教育上裨益（ひえきすくな）尠カラザルヲ信スルニ因リ、該校位置ヲ本県下ニ指定セラレンコトヲ望ム」とし、そのための建設費を国庫に寄付する用意があることを述べて誘致を行っています。

以上のように、愛知県では約二年にわたる誘致活動を行いましたが、一九〇一年一月に第七

高等学校は鹿児島県に設置されることが決定されたのでした。

◆愛知県による誘致活動②

第七高等学校の誘致が実現しなかった愛知県では、その後数年の間、官立高等学校誘致に向けた目立った活動は行われませんでした。しかし、一九〇五（明治三八）年三月に名古屋高等工業学校（現在の名古屋工業大学の前身校）が設置されたことを契機に、愛知県では再び官立高等学校誘致に向けた機運が高まったのでした。

すなわち愛知県では、当時すでに計画していた県立第五中学校建設のための予定地（約四万九五〇〇㎡）の提供と校舎等の建設設備費用（約二八万六六〇〇円）の寄付を条件に、第八高等学校の誘致に動き出しました。こうした動向に対して当時の新聞は、「高等学校の設立」と題した論説で「愛知県否寧（いやむし）ろ中部日本の文教の機関に一段の進歩を加へたるものといふ可（べ）し」（『扶桑新聞』一九〇七年一一月二九日付）と述べています。

当時、八高設置については愛知県のほかに静岡県と長野県が誘致運動を行いました。一九〇七（明治四〇）年一一月、愛知県は通常県会において翌一九〇八年度からの三年間に合計二八万六五六五円二銭を国に寄付する議案を可決しました。また愛知県は、同年一二月に行われた文部省による実地検分を踏まえて、愛知郡呼続（よびつぎ）町大字瑞穂字神ノ内周辺の土地を買収すること

になりました。ただし、この土地は、翌一九〇八年四月に愛知県への八高設置が確定した際、文部省の意向によって第五中学校用地として利用されることになり、愛知県は愛知郡呼続町大字瑞穂字山ノ畑周辺の第五中学校敷地（約五万四〇〇〇㎡）の買収費用（約一万三九〇〇円）を国に寄付することになりました。

◆八高の創設

一九〇八（明治四一）年三月三一日、「文部省直轄諸学校官制中改正」（勅令第六八号）が公布され、翌四月一日に第八高等学校が創設されました。それは、愛知県による官立高等学校誘致活動が本格化してからちょうど九年後のことでした。なお、同年四月八日には文部省令第六八号によって八高に大学予科が設置されています。

八高の具体的な開校準備は、文部省内に設けられた仮事務所において創設後直ちに開始されました。この事務を任されたのが同年四月に八高校長事務取扱に任命された大島義脩（よしなが）文部省視学官で、この大島が同年六月に初代の第八高等学校長に就任しています。

◆初代校長大島義脩（よしなが）

ここで、第八高等学校初代校長に就任した大島について簡単に述べておきます。

大島は、一八七一（明治四）年に丹波国氷上郡（現在の兵庫県氷上市）で生まれました。少年時代に故郷を離れ、母親の実家がある東京に移った後、中学生時代を長崎の中学校と大阪（のちに京都に移転）の第三高等中学校（三高）で過ごしています。三高卒業後、大島は再び東京に戻って帝国大学文科大学哲学科に入学し、一八九四年には同哲学科を首席で卒業すると同時に帝国大学大学院に入学しています。

その後、第四高等学校教授、東京音楽学校長等を歴任した大島が、八高の初代校長に就任したのは三八歳のことでした。以後、一九一八（大正七）年に女子学習院長に就任するまでの一〇年間、大島校長は創意工夫をこらしながら草創期の八高の基盤づくりを意欲的に行っています。指導教官制度、軍事教練と検閲（後述）、創立一〇周年記念祝賀式の挙行、学校付近に設けられた公認下宿、各種運動の奨励と選手制の否定（後述）などの大島校長の学校運営方策については、のちに「創意工夫に出た各種の制度組織その他は一つの新しい高校風を樹立し、後の新設高校のモデルになった点が少なくない」とされています。

初代校長　大島義脩
（1916年、『大島義脩伝』より）

◆第一回入学試験

戦前、官立高等学校の入学試験等に関する情報は『官報』に掲載されていました。第八高等学校創設後の一九〇八（明治四一）年四月一八日付『官報』には同年度の官立高等学校募集人員が告示され、八高の募集人員は合計二五一（第一部甲・乙類四二、丙類四二、第二部甲類一二三、乙類四四）名でした。なお、開校初年度は第一部と第二部の募集が行われただけで、第三部募集が行われたのは翌一九〇九年五月のことでした。

一方、同月二四日付『官報』には募集要項が掲載されました。八高の出願期日は七高とともに五月一五日までとされ、七高と八高の体格検査は五月三〇・三一日、同じく七高・八高の選抜試験は六月一日～四日までとされました。これをうけて八高では、名古屋高等工業学校に入学試験事務所を設けて第一回入学試験を実施しました。

第一回入学試験では一三六五名の志願者があり、六月二〇日付『官報』で二五一名の入学許可者が掲載されています。また八高入学者の出身地は全体として四一府県に分布していましたが、出身地別の上位は愛知県三四名、兵庫県一九名、東京府一七名、大阪府一六名でした。

なお、八高生の出身地については、創設当初から地元愛知県が最も多く、大正期末から昭和期初めの三〇％台を除いておおむね二〇％台となっていました。

◆初年度授業の開始

第一回入学試験を終えた後、それまで文部省内に置かれていた第八高等学校の仮事務所が一九〇八（明治四一）年七月に愛知県会議事堂内へと移されました。また、同年九月一一日には元県立第一中学校（名古屋市東区外堀町）の校地・校舎を使用して八高が開校され、翌日には第一回入学式が挙行されました。

なお、八高の開校に先立って同年九月初めには名古屋市内の妙本寺（東区小川町）ほか六つの寺院に代用の学寮が設置されています。

仮校舎における八高の授業は、同年九月一四日から開始されました。これによって八高は、大島校長ほか一七名の教員スタッフのもと名実ともに旧制高等学校としての教育活動の第一歩を踏み出したのでした。

◆校舎等の新築と開校式

第八高等学校の本校舎建築は、一九〇八（明治四一）年五月に着工されました。翌一九〇九年九月、木造平屋建て六六一㎡の物理教室と木造二階建て六五四㎡の学寮（北寮）が完成し、その後の授業の一部は新築の物理教室でも行われました。そして同年一二月、八高は愛知郡呼続町大字瑞穂字山ノ畑に完成した新築校舎・学寮へと移転しました。

創設当時の校舎（『第八高等学校学寮史』より）

本校舎等の完成から約一年半後の一九一一年七月一日、八高の開校式と第一回卒業式が同時に挙行されました。